In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	『南山俗語考』の唐音について(3)
Author	岩本, 真理
Citation	人文研究. 45 巻 5 号, p.471-500.
Issue Date	1993
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学文学部紀要
第45巻　第5分冊　1993年　1頁～30頁

『南山俗語考』の唐音について（3）

岩　本　真　理

前々稿目次　1　はじめに
2　「長短雑話」と「君臣唐話」
3　内閣文庫本「君臣唐話」
4　唐音一覧表（【果摂】より【止摂】まで）
前　稿　　唐音一覧表（【效摂】より【臻摂】まで）
本　稿　　唐音一覧表（【宕摂】より【通摂】まで）
5　カナ表記の特徴
6　唐音の重層性

【宕摂】

〈開口一等〉

	平	上	去	入
端	當 K J N タン			
透	湯 K J N タン			

定	Kダン 當Jダン，タン Nダン Kダン 塘Jタン Nダン K 唐J N ダン タン			
泥				
來			K 浪J N ラン	K 落，樂J N ロ
精				Kツヲ，ツヲ 作J N ツヲ、
清				
従				Kヅヲ，ツヲ，ツヲ 昨J N ヅヲ、
心				
邪				
見				Kコ，コ、 各J N コ
溪				
羣				
疑				

〈開口三等〉

	平	上	去	入
娘	K 娘 J } ニヤン N			
來	K 良，涼 J } リヤン N	K 兩 J } リヤン N	K 量 J } リヤン N	Kリヨ，リヨ 略 J } リヨ N
精	Kツヤン 将 J ヂヤン，チヤン Nツヤン			
清				
從				
心	K 相，箱 J } スヤン N	K 想 J } スヤン N		
邪		Kツヤン 像 J ヂヤン Nヅヤン		
知	K 張 J } チヤン N	K 長 J } ヂヤン N　チヤン		
徹			K 暢 J } チヤン N	
澄		K 丈 J } ヂヤン N		K　ヂヤ 着 J } ヂヤ，チヨ N
莊	Kチヨワン 装 J チハン Nチワン		Kチヨワン 壮 J チハン Nチワン	

初				
崇	床 K J N ギヤン			
生		K シヤン 爽 J スヤン N シヤン		
章	章 K J N チヤン			
昌			K チヤン 唱 J ギヤン N チヤン, ギヤン	
船				
書	K ショワン, ショワン 傷 J シヤン N シワン	賞 K J N シヤン		
禪	嘗 K J N チヤン ギヤン	上 K J N ジヤン	尚 K J N シヤン, ジヤン ジヤン	
日				若 K J N ジヨ
見				
溪				却 K J N キヤ
羣				
疑				

暁匣	香郷 K J N ヒヤン			
影云以			様 K J N ヤン	薬 K J N ヨ

〈合口一等〉

	平	上	去	入
見溪羣疑	K クワン 光 J クハン N クワン			
暁匣	黄 K J N ワン			

〈合口三等〉

	平	上	去	入
非	K 方 J N ハン		K 放 J N ハン	
敷	K 芳，妨 J N ハン		K 訪 J N ハン	
奉	K 房 J N ワン			
微		K 網 J N ワン	K 忘 J N ワン	
曉			K ホワン 況 J N ハン	
匣				
影				
云	K 王 J N ワン			
以				

[注] 堂：〈J〉ダン2例，タン1例

塘：〈K〉ダン，タン各1例

作：〈K〉ツヲ3例，ツヲ1例

昨：〈K〉ヅヲ4例，ツヲ，ツヲ各1例

各：〈K〉コ10例，コヽ1例

略：〈K〉リヨ2例，リヨ1例

将：〈J〉ヂヤン3例，チヤン1例

着：〈J〉〈N〉とも，‘排着’，‘乗着’の場合ヂヤ，‘着實’の1例のみチヨ

唱：〈N〉チヤン9例，ヂヤン4例

傷：〈K〉シヨワン3例，シヨワン1例

尚：〈K〉シヤン2例，ジヤン1例

【江摂】

〈開口二等〉

	平	上	去	入
見 溪 羣 疑	K 江J N キヤン		Kキヤン 降Jヤン Nキヤン	K 覺J N キヤ
曉 匣		K 項J N ハン		

［注］降：「光降」の「降」

【曾摂】

〈開口一等〉

	平	上	去	入
端 透 定	K 登，燈 J テン N	K 等 J テン N		K 得 J テ N
泥 來	K 能 J 子ン N			
精 清 従 心 邪	K ツエン 曾 J ヅエン，ツエン N			K ツエ，ソエ 則 J チエ，チエ、 N ツエ
曉 匣				K 黒 J へ N

〈開口三等〉

	平	上	去	入
幇 滂 並 明	K 憑 J ビン N			
精 清 従 心 邪				K スイ 息 J スイ，スエ N スイ，スイ
知 徹 澄				K ヂ，チ 直 J チ N ヂ
荘 初				

崇生				K スヱ，スエ 色 J } スエ N
章昌船	K ヴイン，ヂイン，ヂン 乗 J } ヂン N			K 食 J } ジ N
書・禪	K ヂン，ヴイン，ヂイン 承 J } ヂン N			K 式 J } シ N
見溪羣疑				K ギ 極 J キ N ギ
曉匣			K 興 J } ヒン N	

〈合口一等〉

	平	上	去	入
見 溪 羣 疑				國 K J N クヲ
曉 匣				或 K J N ヲ

［注］則：〈K〉ツエ2例，ソエ1例；〈J〉チエ2例，チエヽ1例

曾：〈J〉〈N〉ともヅエン，ツエン各1例

息：〈J〉スイ2例，スエ1例；〈N〉スイ2例，スイ1例

直：〈K〉ヂ2例，チ1例

色：〈K〉スエ4例，スエ2例

乘：〈K〉ヅイン3例，ヂイン，ヂン各1例

承：〈K〉ヂン3例，ヅイン，ヂイン各2例

【梗摂】

〈開口二等〉

	平	上	去	入
幇				

滂 並 明	Kペン 烹Jヘン Nペン			Kべ，ぺ 白Jべ，ぺ Nべ
端 透 定		K タア-，タア、 打J N } タア		
泥 來		K 冷J N } レン		
荘 初 崇 生	K 生J N } スエン			
見	K 更J N } ケ゜ン			

溪	K 坑 J N カン			K 客 J N ケ°
羣				
疑				
曉				
匣	K 行 J N イン			

〈開口三等〉

	平	上	去	入
幇		K 餅 J N ピン		
滂				
並	K 平 J ピン N ビン			
明	K 行 J N ミン　K 名 J N ミン		K 命 J N ミン	
泥				
來		K 領 J N リン		

精清従心	Kツイン 清Jチン Nツイン Kツイン　Kヅイン 晴Jヂン　情Jヂン，チン Nツイン　Nヅイン	Kツイン 請Jツイン，ヅイン Nツイン Kヅイン 静Jヂン Nヅイン	Kヅイン，ヅイン，ツイン 淨Jヅイン，ツイン Nヅイン	Kスイ 昔Jシ Nシ，スイ
章昌船書禪			K 正J　チン N	K 赤J　チ N Kセ 適Jシ Nセ K 盛J　ヂン Nジン K 石J　ジ N
見溪羣疑		K 景J　キン N		

影			K 映 J } イン N	
云				
以	Kイン 贏 J } なし N			

〈開口四等〉

	平	上	去	入
幇				Kピ，ヒ 壁 J } ピ N
滂				
並	K 瓶 J } ビン N	K 並 J } ビン N		
明		K 酩 J } ミン N		
端		K 頂，酊 J } テ゜ン N		K 的 J } テ N
透	K 聽 J } テ゜ン N			
定	Kデイン　Kデン 亭 J } なし　停 J テ゜ン N　Nテ゜ン，デ゜ン Kデン，デン 項 J テ゜ン Nテ゜ン，テ゜ン，［デ゜ン］		Kデン 定 J } デ゜ン N	

泥			Kニン 寧J N なし	
來				
見				Kキ 激Jキ，ヒイ Nキ
溪				K 吃J N チ
羣				
疑				

〈合口三等〉

	平	上	去	入
見				
溪				
羣	Kギョン 瓊J N なし			
疑				

[注] 白：〈K〉べ，ぺ各2例；〈J〉べ3例，ぺ1例

打：〈K〉タアー13例，タ<u>ア</u>ヽ2例

行：「行為」の「行」

請：〈J〉ツイン8例，ヅイン1例

情：〈J〉ヂン4例，チン1例

淨：〈K〉ヅイン3例，ヅイン，ツイン各1例；〈J〉ヅイン4例，ツイン1例

昔：〈J〉シ，スイ各1例

壁：〈K〉ピ，ヒ各1例

停：〈N〉テ゜ン，デ゜ン各1例

庭：〈K〉デン，デン各1例；〈N〉デン，デン各1例，デンは朱でデ゜ンに改める

激：〈J〉キ，ヒイ各1例

【通摂】

〈合口一等〉

	平	上	去	入
幇				
滂				
並				
明	蒙 K J N モン			木 K J N モ
端	東 K J N トン			
透	通 K J N トン			
定	同 K J N ドン			

泥 來	K 攏 J N ロン		K 弄 J N ロン	
精 清 從 心 邪		K ツヲン 總 J N ツヲン	K 送 J N ソン	
見 溪 羣 疑	K 公 J N コン K 空 J N コン			
曉 匣	K 紅 J N ホン			

影 云 以				K 屋 J ヲ N

〈合口三等〉

	平	上	去	入
非 敷 奉 微	K 風 J ホン N	K ウヲン 奉 J ヲン N ウヲン		K ホ 福 J なし N K ホ，フヲ 服 J ホ N
泥 來	K 濃 J ノン N K 龍 J ロン N			
精 清 從	K ヅヲン 從 J ヅヲン，ツヲン N ヅヲン			

心邪				粟 K J N ソ
知徹澄	中 K J N チョン			竹 K J N チョ
	蟲 K J N チョン			軸 K ギョ J チョ N ギョ
荘初崇生				縮 K ショ J ソ N ショ
見溪羣疑		恐 K J N コン		菊 K キョ J N キョ
				曲 K J N キョ
				玉 K J N ヨ

影 云 以			用 K J N ヨン	

［注］服：〈K〉ホ2例，フヲ1例

従：〈J〉ヅヲン，ツヲン1例

※　唐音一覧表訂正

【果摂】〈開口一等〉　我〈K〉ゴヲー，ゴヲ，ゴヲヽ，コヲヽゴウ

何〈K〉ホウ，ホヲ，ホヲヽ，ホヲー

［注］　他〈K〉タアヽ，ダアー各1例

那〈K〉ナア、2例

【假摂】〈開口二等〉　怕〈K〉パアー，ハアヽ，バアー；〈J〉〈N〉パア

［注］　且〈K〉ツア、，ツヱヽ，ツヱー各1例

【遇摂】［注］　去〈K〉キュイ 31例，キュイ 10例；〈N〉キュイ 36例，チュイ 1例

【蟹摂】〈開口三四等〉齊〈K〉ヅイー；〈J〉ヅイ，ヅイ，ツイ；〈N〉ヅイ、，ヅイー，ヅイ

〈合口二等〉　懐〈K〉〈J〉〈N〉ワイ

［注］　在〈K〉ヅア1例

齊〈J〉ヅイ2例，ヅイ，ツイ各1例

【止摂】〈開口三等〉　斯〈K〉スウ；〈J〉〈N〉なし

只〈K〉ツエ，ツエ；〈N〉ツエ，ツエ

〈合口三等〉　非〈K〉フイー

未〈K〉ウイー，ウイ、

［注］　池〈N〉ツウ，ヅウ各1例

只〈K〉ツヱ7例，ツヱ2例；〈N〉ツヱ5例，ツヱ4例
未〈K〉ウイー，ウイヽ各1例
【效摂】〈開口三等〉　笑〈J〉〈N〉シヤ。ウ
【山摂】〈合口二等〉　饌〈K〉〈J〉〈N〉ヅアン
【臻摂】〈開口三等〉　貧〈K〉〈J〉〈N〉ビン
〈合口一等〉　穩〈J〉アヱン，アヱン；〈N〉ヲ。ヱン，ヲイン
［注］　恩〈N〉ヲヱン10例，ヱン1例
穩〈N〉ヲ。ヱン2例，ヲイン1例
［補注］　日〈J〉ジ21例，シ1例

5　カナ表記の特徴

唐音一覧表をみるに，濁音の表記が必ずしもあらわれないなど，表記上の不統一が目立つ。これは，誤刻，版木の磨滅，或いは，誤記，誤写に起因するものであろう。K，J，N，それぞれの表記体系内部でのユレはひとまずおき，K，J，N間の相違について着目すると，概ね次のような傾向を指摘することができる。

① 長音の表記：Kは“ー”，J・Nは“ヽ”を用いる。
例：「誤」K［ウー］，J・N［ウヽ］

② 二重母音のワリ符号：Kは多用するが，J・Nでは範囲が限定される。注1　例：「隨」K［ヅ。イ］，J・N［ヅイ］

③ 山摂合口呼，蟹摂合口呼などでの介母－wの表記：K・Nは“ワ”を，Jは“ハ”を用いる。注2　例：「管」K・N［クワン］，J［クハン］；「快」K・N［クワイ］，J［クハイ］

この三点は，唐音カナ表示に投影された原音の違いに由来しているというよりも，表記法そのものについての改変が，K（或いはN）の編者・校訂者によって体系的におこなわれたことを裏付けるものであろう。

なお，次のように，Jの明らかな誤記をN・Kで訂正している例がみられる。

④ 「光降」の「降」への表音：Jは［ヤン］，N・Kは［キヤン］と表示する。Jは「降」を見母とはみなさず匣母（「降伏」）と誤認した

ゆえに生じた注音であろう。

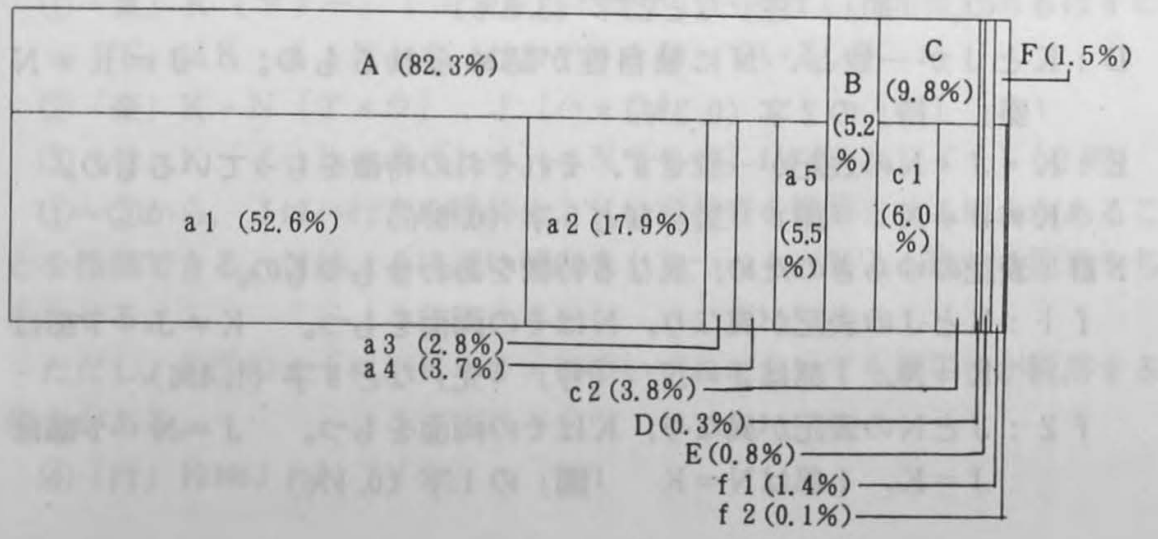
⑤「少」「小」への表音：Jはいずれにも［スヤ。ウ］と表示するが，N・Kは「少」（書母）には［シヤ。ウ］，「小」（心母）には「スヤ。ウ」をあて，区別する。同じ書母の「燒」には，K・J・Nともに［シヤ。ウ］と表音しているので，Jの矛盾が目立つ。注3　Jは「少」を「小」と見誤ったものであろうか。注4

⑥「挿」への表音：Jは［サ］，Nは［ツア］，Kは［ツア］と表示する。初母に［サ］をあてるのは妥当性を欠くが，『唐話纂要』で「挿」に［サ゜］の表記を与えていることと関連する可能性もある。同書ではこの他、精母・清母に［サ゜］を用いる場合がある。しかしK・J・Nでは［サ゜］の表記は全くみられない。　例：「再」『唐話纂要』［サ゜イ］，K・J・N［ツアイ］

⑦尖音表記の明瞭化：K・J・Nともに尖音・団音の区別があるが，注5 尖音について，N・Kが細音を表記に反映させているのに対し，Jでは一部を除いて不明瞭である。　例：「浄」K・J・Nともに［ヅイン］，「清」K・N［ツイン］J［チン］；「秋」K［ツイ。ウ］，N［ツイウ］，J［チウ］注6

④⑤のように明らかな訂正は他にもみられるが，注7 個別の問題についてはひとまず置き，全般的な表記の一致・類似という面にふれておきたい。

下の表は，K・J・Nの唐音一覧表にあらわれた総異なり字数624字から，注8 字句の改変によりK・J・N内で出現の有無が生じた25字注9 を差し引いた599字について，カナ表記の一致・類似する割合を示したものである。注10



A群：K・J・Nが一致，或いはほぼ一致していると認められるもの。

a 1：K＝J＝N　K・J・Nが完全に一致。「古」「小」など 315字（52.6%）

a 2：K≒J＝N　JとNが一致し，Kとは表記上の違いがみられる（前述した①，②の特徴などを含む）。「火」「拿」など 107字（17.9%）

a 3：K＝J≒N　KとJが一致し，Nがやや異なる様相を呈するが，濁音表記の欠落など誤記と思われるものが多い。「散」「長」など16字（2.8%）

a 4：K＝N≒J　KとNが一致し，Jとは表記上の違いがみられる（前述した③の特徴をほぼ反映する）。「快」「光」など22字（3.7%）

a 5：K≒J≒N　表記上のユレがかなり大きく，それぞれの表記システムが一致してはいないが，差異は微細なものにとどまり。互いに似通っていると認められるもの。「坐」「筭」など33字（5.5%）

B：JとNが一致し，Kに独自性が認められるもの。　K≠J＝N　「夏」「伴」など31字（5.2%）

C群：NとKが一致，或いはほぼ一致し，Jとの間に，いわば断層といえるような差異が認められるもの。

c 1：J≠N＝K　KとNが一致し，Jに独自性が認められるもの（前述の⑦を含む）。「豪」「煎」など36字（6.0%）

c 2：J≠N≒K　KとNがほぼ一致し，Jに独自性が認められるもの。「節」「恩」など23字（3.8%）

D：KとJが一致し，Nに独自性が認められるもの。　J＝K≠N　「盛」「持」の2字（0.3%）

E：K・J・Nの表記が一致せず，それぞれの特徴をもっているもの。　K≠J≠N　「諭」「装」など5字（0.8%）

F群：表記のゆらぎのため，異なる特徴をあわせもつもの。

f 1：KとJの表記が異なり，Nはその両面をもつ。　K≠J　1部はK＝N，1部はJ＝N　「兮」「先」など8字（1.4%）

f 2：JとNの表記が異なり，Kはその両面をもつ。　J≠N　1部はJ＝K，1部はN＝K　「園」の1字（0.1%）[注11]

A群が82%をしめることから，K・J・Nの音表記がかなり一致しているとみなすことは可能であろう。しかし，BとC群をあわせると15%に達し，“K≠J”，すなわちKとJの間で明らかな差異がみてとれるものが，決して無視できるような範囲内にとどまっていないことは明らかであろう。BとC群の差異は，校訂途上の産物とみられるNが，Jと一致した音表記を保持する字群（B）と，改訂されてKと一致する音表記をもつ字群（C群）とからなることに起因している。さらにF群のｆ１にみられるNの表記上のゆらぎはそれを如実に示すものであろう。B・C群・ｆ１の合計は全体の16.4%に達し，数量的な面からみてもこの改変，すなわちJからKにいたる過程で加えられた改訂が「微細」のひとことで片付けられるものでないことを物語る。しかも重要なことは，J・C群・ｆ１に属しているものが特定の声母・韻母に集中しており，A群のものと重なることがない点である。これはすなわち，この改訂が恣意的におこなわれたものではなく，意図的・体系的に特定の声母・韻母の表記に手を加えたものであることを示していよう。筆者はこの改訂が，単に音表記上の改訂（或いは精密化）というレベルにとどまらず，唐音カナ表記に投影されるところの原音の違い，すなわち，JとKが反映する唐音そのものの違いに由来する可能性を否定できないと考えている。次節において，具体的な例をあげ検討していくことにする。

6　唐音の重層性

6．1　声母

匣母開口呼は，K・J・Nのいずれにおいてもハ行音で表わされる傾向があるが，次のような例外がみられる。

①「夏」K［ヤアー］；J・N［ヒヤア］（ただし，同音であるはずの「下」はK・J・Nとも［ヒヤア］となっている。）

②「豪」K・N［ア。ウ］；J［ハ。ウ］

③「兮」K［イー］；J［ヒイ］；N［ヒイ］（4例），［イー］（2例）

①～③から，Jはハ行音を維持し，Kは頭子音を脱落させる場合があることを指摘できる。Nは，Jに近い傾向をもちつつも，Kと一致する面ももちあわせる。

ただし，④⑤のように，K・J・Nのいずれにおいても頭子音が脱落する場合がある。

④「行」K・J・N［イン］

⑤「肴」K・J・N［ヤ。ウ］

ここで①～⑤について，岡嶋冠山『唐話纂要』（1716）注12 における表記，及び文雄『磨光韻鏡』（1744）注13の華音表記（文雄いうところの「杭州音」による表記）をかかげておく。

①′（「夏」のかわりに「下」で代用）

「下」『唐話纂要』［ヒヤア・ヒアヽ］

『磨光韻鏡』［ヤア］

②「豪」『唐話纂要』［ハ。ウ］

『磨光韻鏡』［ア。ウ］

③「兮」『唐話纂要』『磨光韻鏡』ともに［イ、］

④「行」『唐話纂要』［ヒン］

『磨光韻鏡』［イン］

⑤「肴」『唐話纂要』　当該字なし

『磨光韻鏡』［ア。ウ］

これらを比較すると，Jは『唐話纂要』に近く（ただし③④を除く），Kは『磨光韻鏡』に近いとみなすことができよう。

非常に興味深いことに，上記の『唐話纂要』と『磨光韻鏡』にみられた相違は，朝岡春睡の著わした『四書唐音弁』（1722）において左右音の対立という形で鮮明にあらわれている。『四書唐音弁』は「学庸」「論孟」から抽出された約2400字について注音をほどこすが，該当字の右に「南京音」，左に「浙江音」という体裁をとる。今，高松（1985ａ）により，先ほどの①′②④との比較のために引用しておくことにする。注14

①′「下」右（「南京音」）［ヒヤア］

左（「浙江音」）［ヤア］

②「豪」右（「南京音」）［ハ。ウ］

左（「浙江音」）［ア。ウ］

④「行」右（「南京音」）［ヒン］

左（「浙江音」）［イン］

『四書唐音弁』の記述に従うならば，『唐話纂要』とJは「南京音」的で，『磨光韻鏡』とKは「浙江音」に属するとみなしうる。ただし『四書唐音弁』では匣母合口呼においても「南京音」の特徴として頭子音が残留するのに対し，『唐話纂要』とJは頭子音を脱落させる場合が多いので，この点では「浙江音」的である。

6．2　韻母

前節5の⑦で触れたように，K・Nでは，細音と洪音とを明確に区別する表記法をとるが，Jではごく一部を除いて不鮮明である。注15

また咸摂開口三等・四等の-iemについてKでは「念」［子ヱン］と表記するのに対し，J・Nでは［子ン］にとどまることや，同様に山摂開口三等・四等において，K・Nは-ienを反映した表記をとりJにはその特徴がみられないことも指摘しておきたい。注16

以上の韻母の特徴は，表記上の改変がなされた結果，Kの表記が精密化したことに起因する可能性も否定はできない。しかし，前述の声母同様に，Kは『磨光韻鏡』の華音を一つの指標としてあおいでいたむきもあり，筆者は後者の可能性が高かったのではないかと考える。

6．3　まとめ

J（『南山考講記』）の成立から半世紀隔てた1812年にK（『南山俗語考』）は公刊される運びとなる。この間に大幅な改訂が加わったことは拙稿（1989）で述べた通りであるが，唐音のカナ表記についても，単なる訛音訂正という範囲にとどまらず，意図的に依拠する音系を変更したとも考えられるのではないか。『南山俗語考』の華音校訂者，石塚崔高にとって，『四書唐音弁』がいう所の「南京音」的性格を色濃くのこす『南山考講記』の注音にはかなり抵抗があったようで，「浙江音」に近付ける傾向がみてとれる。なお，内閣文庫本『君臣唐話』が石塚本人の手によるものかどうかは判断できないが，同一字について「南京音」型と「浙江音」型が混在する例がみられることから複数の改訂者がかかわっていた可能性も否定はできない。いずれにせよ，改訂作業途上の手稿本が偶然保存された貴重な資料であることは確実である。

注

1　效摂では，K・J・Nのいずれにおいても，概ねワリ符号が用いられている。　例：「毛」［マ。ウ］，「老」［ラ。ウ］

2　假摂では，J・Nともに“ハ”を用いる傾向がある。
例：「寡」K［クワア］，J・N［クハア］

3　一方，心母の「消」「笑」について，Kは「小」と同じ［スヤ。ウ］を用いて一貫しているのに対し，Jは［シャ。ウ］をあて，書母の「燒」と一致する。このようにJでは歯頭音と舌上音とを，表記上明確に区別しない傾向が顕著にみられる（流摂・宕摂などにおいて看取できる）。

『唐話纂要』でははっきりと区分されているので，Ｊの特異さが目を引く。なおこれについては後にまた言及する。ついでながら，效摂心母でのＮの表音は，「消」はＫと一致して［スヤ。ウ］，「笑」はＪと一致して［シヤ。ウ］となっている。Ｎの改訂が徹底していないことを物語っていよう。

4　Ｊにおける「少」の総出現数は９であるが，９回全て［スヤ。ウ］となっている。

5　拙稿（1989）注15は，Ｊに尖・団の区別がないかのような記述となっており，不適切である。

6　Ｋ・Ｎでは，清母の「秋」と，章母の「舟」・禅母の「酬」（ともに［チウ］）が表記上区別されている。一方，Ｊでは，「秋」「舟」「酬」の全てが［チウ］となっている。注３で指摘したように，歯頭音と舌上音の区分がなされていないのである。ただし，Ｊは「精」組（歯頭音）の内，「心」母については，細音を明示する傾向がみられる。
例：「小」［スヤ。ウ］，「心」［スイン］，「新」［スイン］

7　逆にＮ・ＫがＪを改悪したものもみられる。　例：「軸」（澄母）Ｊ［チヨ］，Ｎ・Ｋ［ギヨ］（［ヂヨ］と表記すべきところ）

8　「那」（上声）と「那」（去声）は別字として数える。「下」についても同様。

9　25字の内訳は次の通り：Ｊにのみ出現――１字（「壺」）；Ｋにのみ出現――16字（「輸」など）；Ｊ・Ｎにのみ出現――７字(「写」など)；Ｋ・Ｎにのみ出現――１字（「孟」）

10　Ｎの表音の若干数は，朱書きで訂正されたカナ表記によっている（唐音一覧表で［　］内に示されたもの）。

11　「園」はＪで［エン］，Ｎで［イエン］と表記されるが，Ｋの５例中，４例がＮと一致し，Ｊとは１例しか一致しない。従って，ｆ１として一類を立てるより，ｃ１（Ｊ≠Ｋ＝Ｎ）として処理するほうが適切であるかもしれない。

12　林（1988）による。

13　勉誠社文庫90による。

14　本稿の執筆時点において，筆者は『四書唐音弁』（京都大学附属図書館蔵）を閲覧していない。以下にあげるのは，全て高松（1985ａ）p.96からの引用である。

15　『磨光韻鏡』はK・Nと同様である。
　例：「秋」［ツイ。ウ］；「周」（＝「舟」）［チウ］
16　『磨光韻鏡』は-iem, -ienを反映させた表記をとる。ただし，咸摂舌音の四等は以下のような表記である。
　例：「點」［テム］；「念」［子ム］
　なお『磨光韻鏡』の華音（＝杭州音）と『四書唐音弁』の「浙江音」は，狭義の「南京音」（＝南京官話，下江官話）と対峙することから，「杭州音」＝「浙江音」と仮定する高松（1985ａ）（1985ｂ）に本稿は従っておく。

参考文献

石崎又造（1967）『近世日本に於ける支那俗語文学史』　清水弘文堂書房
岩本真理（1989）「『南山俗語考』のことば」『鹿児島経大論集』第30巻第1号
（1991）「『南山俗語考』の唐音について(1)」『人文研究』第43巻第11分冊
（1992）「『南山俗語考』の唐音について(2)」『人文研究』第44巻第5分冊
岡島昭浩（1988）「近世唐音の重層性」『語文研究』（九州大学国語国文学会）63号
高松政雄（1984）「近世的唐音——破擦音を中心として——」『岐阜大学研究報告人文科学』第32巻
（1985a）「近世唐音弁——南京音と浙江音——」『国語国文学』（岐阜大学）17号
（1985b）「近世的唐音の音体系——江南浙北音としての——」『国語国文』54巻7号
（1986a）「近世的唐音の音体系——その二，韻母の面よりの考察——」『国語国文』55巻6号
（1986b）『日本漢字音概論』風間書房
中田喜勝（1970）「南山俗語考の音韻について」『中国文学論集』（九州大学中国文学会）創刊号
武藤長平（1926）『西南文運史論』　岡書院
矢放昭文（1981）「『南山俗語考』初探」『鹿児島経大論集』第23巻第1号

林　武實（1988）「岡嶋冠山著『唐話纂要』の音系」『漢語史の諸問題』
京都大学人文科学研究所